
【Nine Lives】～9つの命

Michel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【Nine Lives】～9つの命

【著者名】

Michel

N3574E

【あらすじ】

“猫は命を9つ持っている”そんな言い伝えを知っていますか？確かに猫たちは、命を9つ持っています。でも、もしあなたが猫ならば、残念な事に9つのつけまでは使いきってしまっているけれども……

(前書き)

ジャンルをファンタジーにしようか。童話にしようか、ちょっと迷つてしましましたが、とりあえず、ファンタジーで掲載させていただきました。名もない猫とネズミといつづりの物語。

“ 猫は命を9つ持っている ”

そんな言い伝えを知っていますか？確かに猫たちは、命を9つ持つています。でも、もしあなたが猫ならば、残念な事に9つのうち8つまでは使いきってしまう。けれども……

* * *

ある小学校の校庭の片隅に、二ワトリ小屋がありました。とても平凡なその小屋には、ありきたりのめん鳥が飼われていました。白い体に赤いとさか、他の二ワトリと違っているところといえば、少し小さくて尾が長いといったところでしょうか。

それは、秋の夜の事、二ワトリは、網田のすきまから小屋の中に入り込んできたネズミにちょっと怒ったような声をあげました。

「ねえ、それ、私のなんだけど」

ネズミは、二ワトリ小屋の餌箱にあつたトウモロコシの粒を上手そうにほおばりながら笑いました。

「ふふん、知るもんか。そんな事、いったい、誰が決めたんだい？」

「それは、一生けんめい、二ワトリ小屋の世話をしてくれてる生徒たちが、私のために作ってくれたご物なのよ

ネズミの顔色がさわっと青く変わったのは、その時でした。

「その一生けんめいな生徒たちが、この小屋を襲いに来てるぞ……

いかにも柄の悪そうな中学生たちが、どかどかと小屋の中に入ってくるではありませんか。

“違ひ、この子たちがこの生徒じゃない”

ネズミはこち早く柵をすり抜けで小屋の外に逃げていってしまった。ところが、

逃げ場のない「ワトツ」は、中学生の中でも一番乱暴そうな男子に捕えられてしまったのです。

「ちょうどこいや、この鳥、焼き鳥にして食つりまえ！」

“ええっ”

「ワトツはとんでもないわと、声をあげました。

「だめ、焼き鳥なんて……それだけは、絶対にだめ！」

その時、一匹のトラ猫が風のように現れました。

銀の爪に、鋭い牙、極めつけは最終兵器の猫キック。

「うわわっ、何だこの猫！何処から入ってきた？！」

たちまちのうちに、中学生たちは蜘蛛の子をちらりすくように校庭の外に逃げていってしまいました。

「へへん、どんなもんだい。俺様は強いだろ？」「

トラ猫は、欠けた耳をぴんと動かすと、血濁げな茶色の目を一ワトリに向けました。

「すごい。ネコ君は本当に勇敢。あんな怖そつな中学生をもふともせずに追い払うなんて」

その言葉がさらによしトラ猫の気分を良くさせました。

「当たり前だろ。猫は9つの命を持つて居る。だから死すら恐れはしない。ついていても、ほとんどの猫は8つまでは命を使い切っちゃ

まつてゐるんだ……でも、俺様はまだ、7つしか使っていない。だから……俺は

“もう一回、生まれ変わる事ができるんだよ”

「すうじい。命を9つも持つてるなんて」

また、二ワトリ小屋にもどつてきて、偶然に一匹の会話を聞いてしまったネズミは、しげしげとトラ猫を見つめると、興味津々の顔をして言いました。

「でも、9つのうち、7つは使つちましたって、前の君は、一体、どんな風に死んだの？」

すると、トラ猫は、困ったようにぴんとひげをたてました。

「前の事はよくは覚えてないけれど、まあ、死んだんだからな、いい気分ではなかつただろうぞ。でも、俺様の遠い親戚の言つところでは6番目の俺は、獰猛な野犬たちから子猫を守つて、英雄みたいに死んだそうだよ」

7番目の俺は……全然覚えていないな。

まあ、そんな事は今さら氣にしてねえよと、トラ猫は笑うと、「いけねえ、こんな場所で油売つてる場合じやなかつた。まだ、俺様には大切な用事があつたんだ」

と、大急ぎで校舎の方へ駆けていつたのです。

はねるように駆けてゆくトラ猫の後姿を見つめながら、ネズミはちょっと訝しげに二ワトリの方に目をやりました。

「なんか半分信じれて、半分嘘つぽい話だな。でも、命が9つっていつのはいいな。僕にも余分に命があつたらなあ」

「そ、うか。……8回も生まれ変わったら、私なら退屈でたまらない。だって、自分だけが生まれ変わったって、親や兄弟や友達たちが、みんな死んでしまつたら、楽しくも何ともないわ。永遠の命なんて、つまらないだけよ」

「一コトリの答えにネズミは、ちょっと驚いたように言いました。別に永遠の命とまでは言つてないけど、せめて、予備用にあと1つ命が欲しかつたなあ」

やがて、校庭に吹く風が少し冷たくなつてきました。

「僕もそろそろ、行こうかな。でも……その前に、あのトラ猫の行く先をチェックしてくる。えらく急いで校舎に入つて行つたよな。きっと、どこぞの美人の猫とデートでもしてるんだぞ」

と、ネズミはおどけたような笑みを浮かべて、一コトリ小屋から去つてゆきました。

どこまでも、好奇心満々のネズミは、ちょっと苦笑いをしてしまいましたが、

なんとなく、ちぐはぐな感じ。

そんな風に感じながら、ふと見上げた夜空では、空の月が朧にかすんで、小学校の校庭に薄暗い影を落としていました。

* * *

小学校の校舎へ潜入していったネズミは、2階にある教室を覗き

込み、そこにトラ猫の姿を見つけて、にやりと笑いを浮かべました。

やっぱり、美人ネコとトーントだ。

トラ猫の相手は、真っ白い雪のような毛並みの猫でした。
「一ノワトリが助けを呼んでたんだ。……で、その時の俺様はものす
じぐ勇敢だったとおもうぜ」

おや、おや。さりとて、さつき不良を追い払った時の白爛話かい。

といふが、ネズミはその時、あれ?と首をかしげたのです。
トラ猫のお相手 - 教室の窓辺を背にした純白の子猫 - のつや
やかな毛並みは、夜光灯の灯かりに照らされて、美しく輝いていま
した。けれども、

あれって……どう見たって

人形だよな。

ネズミは、ふに落ちない顔をして、一匹の猫をじっと見つめ続け
ました。

文化祭を真近にした、この小学校では、子供たちが、出し物のマ
リオネットを粘土や絵具で様々な工夫をこらして作りあげていまし
た。トラ猫が夢中になつて話しかけている“純白の子猫”は、その
中でも一番出来のいい、マリオネットの猫だったので。

「今度、一緒に校舎の屋上に星を見にゆこう。お天気のいい夜には北斗七星が、きれいに輝いているから」

おかしいなあ。あいつ、お人形さんと空想^{うつ}にするタイプじゃないと思^うひただけどなあ……。

あまりにも熱心にマリオネットに話しかけているトラ猫の姿に、ぴんとひげを斜めに揺らした時、ネズミは背中にざくづくと悪寒を感じました。

マリオネットの猫が、一瞬、刺すような視線を、ネズミの方向に送り込んできました。

青い……氷みたいに冷たい瞳。

うわっ！これはヤバイ！

背中の毛がぞくりと立ち上がるような気がして、ネズミはぴょんと、一跳びすると、教室の前から全力疾走で廊下を駆けぬけ、大慌てで階段を下りてゆきました。

マリオネットの猫がいる教室。その危うい空気を感じ取つて逃げる事のできたネズミは、意外と強い心をもつていたのかもしません。ところが、心が未熟な……あの二ワトリ小屋を襲つた中学生たちは、ネズミとは反対にその空気に引きつけられてしまつたのです。

「お、この教室、すげえ。人形がいっぱい！」

3人の少年と1人のおかっぱ頭の少女。校舎の中で遊び場所を探

していた彼らは、教室の棚にずらりと並べられたマリオネットたちの出来栄えに目を輝かせました。

「へええ、小学生が作ったにしてはよく出来てるな」

金の冠をかぶつた王様。

「こちには兵隊がいるわ」

剣を携えた騎士。

弓をつがえた近衛兵。

「ほらっ、戦いだつ！！」

少年たちは、マリオネットを手にとると、それぞれがふざけた仕草で戦いの真似をし始めました。

「よしなさいよ、せっかく作った人形が壊れちゃうでしょっ！」

さすがに小学生たちに悪いような気がして、おかっぱの少女が、少年たちを止めようとマリオネットの方へ手を伸ばした時、

あれ……？

妙に生き生きしそぎてる子猫の人形。

「みんな、こっちに来て！すごく綺麗な人形があるよ。この瞳、青く光つてまるでこっちを見ているみたい」

3人の少年と1人の少女は、覗き込むように、純白の毛並みをもつた子猫の人形に目をやりました。

* * *

「大変だ、大変だ、大変だあつ！！」

慌てふためいて小屋に駆けて来たネズミの姿に、ニワトリは、ぱたぱたと羽を動かし言いました。

「い、いつたいどうしたの？ネズミ捕りのお化けにでも追いかけられてるみたいに」

「ネズミ捕りのお化けだつて？！あいつはそれよりもつと、やっかいかもしないぞ」

「あいつって？」

合点がいかない様子のニワトリにネズミは、まくしたてるよつと元氣を荒げました。

「あの人形から、僕はものすごい悪意の力を感じたぞ」

「あの人形つて……、一体、何の事を言つてるの？」

ニワトリの問いに、ネズミは声を震わせながら言いました。

「トラ猫のデーターの相手だよ。トラ猫は気付いてないんだ。あれは、この世のものじやない。あのままじや、あいつ、とり殺されてしまつが。いくら9つの命を持つているつてつたつて……」

残りはあと一つなんだろ。

* * *

輝く純白の子猫のマリオネット。少年の中の一人が、魅せられたように、白猫のマリオネットを手にとり、その青の瞳を覗き込んだ時、

ぱっと、青の瞳の中に赤い光が浮かび上がりました。

少年たちが教室に入つて来た時、いち早く、掃除道具入れの後ろ

に逃げ込んでいたトラ猫はちぇつと、口をとんがらせました。

何だよ。俺の彼女にちょっかい出すのは、やめてくれよ。

ところが、

「うわあつー火、火があ！！」

ぼうっと、少年の目の前で音をたてて燃え上がった、白猫の青い瞳の中の炎。慌てふためいて、少年が白猫のマリオネットを投げ出した時、その火が、教室のカーテンに燃え移つて、驚くようなスピードで天井に這い上がつていったのです。

大慌てで、掃除道具入れの後ろから飛び出したトラ猫は、少年たちに

“お前ら、早く逃げろつーこの火、何だかおかしいぞつ！..”

そう伝えるつもりで鳴き声をあげました。

そうだ、あの白猫は？

あせつて、白猫の方に目をやつてから、トラ猫は少し戸惑つた表情をしました。何故つて、その白猫が赤く燃え立つ炎の中で、青い瞳をきらめかせながら、自分に微笑みかけていたのですから。

* * *

ネズミと一コトリは、小学校の校舎の2階の窓から大きく燃え上がった赤い炎に、ぎょっと目を開きました。

慌てふためきながら、校舎の中から飛び出してきた少年と少女。一コトリは、その時、大きく羽を広げると、夜明けを告げるよう元気に鳴き声をあげました。

私を一ひき出しして…」の一コトリ小屋の扉を開けて！

すると、逃げてゆく中学生たちの中で、おかっぱ頭の少女だけが足を止めたのです。

「今、何か言つた？扉を開けてって言わなかつた？」

戸惑いながら、少女が一コトリ小屋の扉に手をかけた、その瞬間、一コトリは白い羽を大きく広げ、空に飛び立つてゆきました。

「駄目だよ、一コトリさん、校舎の方に行つては…！」

ネズミの静止をふりきつて、炎を広げ、「うう」と燃え上がりだした小学校の校舎の中へ、一コトリは飛んでしまいました。

「何で、一コトリが空を飛ぶの？おまけに、あれじや……本当に焼き鳥になつちまうよ」

あつけにとられながら、ネズミはその様を見つめました。

怖いけど、これは逃げてる場合ぢやないな。

ネズミは勇氣をふりしみつ、ぱくぱくと立ちぬくところの少女を置いて、校舎の方で駆けてゆきました。

小学校の校舎の2階。

突然、燃え上がった火の手。トラ猫は呆然と宙に浮かび上がった白猫に目をやりました。

バチバチと嫌な音をたてて、白猫の体からほとばしってくる火の粉。

「何でだよ？」

トラ猫の問いに白猫は冷たい瞳で答えました。

「学校は嫌い」

「お前、この世の者じゃないな？ 何で俺は今までそれに気づかなかつたんだろ……」

白猫は小ばかにしたように、トラ猫を見下ろして言いました。

「私は可愛がられて幸せに暮らしていた子猫。でも、ある日、家の人が私に言った。“ごめんね、次の家では猫は飼えないの”捨てられた私は、仕方なく、学校の校舎に住みついた」

「そこで、生徒にいじめられでもしたのか？」

小さく首を横に振る白猫をトラ猫はいぶかしげに見つめました。

「生徒は私に、優しかったわ、餌も運んでくれたし。それでも、また私はこう言われた。“ごめん。ノラ猫に餌をあげちゃ、いけないんだつて”その冬、私はお腹をすかせて、体育館の床下で一人で死んだ

「だからって、学校を恨む事はないだろ？！」

「学校は寒かつた。一人、床下で震えて、優しかった生徒たちを思い出すのは尚更、つらかつた。途中で知らぬふりをするなら、何故、優しくするの？学校は嫌い、生徒は嫌い！」

「そんなの駄目だよ！ 猫は9つの命をもっている。そんな風に恨みの心をもっていたら、次の命までが、その心を引き継ぐぞ！」

トライ猫はそう呟んでから、口元をきゅっと閉じて心の中で思いました。

でも、この恨みの心でいつぱいの白猫の命が9番目……最後の命だったのなら、こここの魂は永遠に天国になんか行けないんだ。

すると、白猫はケラケラと声を出して笑いました。

「思い出せないの？自分の事なのに」

「えっ？！」

「私はあなた。今の一つ前のあなた……ただし、私は8番目の命」

トライ猫はその時、一ワタリとネズミに言つた自分の台詞を思い出しました。

“俺様は、命をあと一つ持つてゐる。だから、もう一度生まれ変わることができるんだ”

「勘違いしてるとしよう？今のあなたは9番目の最後の命。だから、もう、命なんて一つたりとも残つてはいないのよ！」

ちつとも、わけがわからない。学校を恨みながら死んでいた白猫が俺の8番目の命だつて？！なひ、この白猫の生まれかわりが“俺”だつていうのか？

驚いて言葉も出ないトライ猫は、白猫は刺すような冷たい視線を送りました。

「9番田の私であるお前は、私があんなに悲しい思いをしたといつのに、何でそんなに楽しげに生きているの？！そんなの許せない。だから、もう2度と生まれ変われないよ！」お前もこの校舎と一緒に燃えてしまえばいいんだわ」

白猫の体が大きく赤く輝いた瞬間、トラ猫のまわりにじょりと火の輪が燃え上りました。

俺が、世の中を恨んでる、この白猫の生まれ変わり？

トラ猫はもう何もしたくなってしまった。そして、ただ悲しげに白猫が炎の中に消えてゆく様を見つめていました。

* * *

「あちちつ、駄田じゅんー！」なんに火の手があがつたら、学校がぜんぶ燃えちまつ

……て言つよつも、おこらも危ねえ。

「コトコトの後を勇んで追いかけたネズミは、『止めときや良かつた』と、ちゅつと舌をならしました。

「おーい、トラ猫、さっさと逃げないと、お前も焼け死ぬぞ！」

それでも、ネズミは炎をかいくぐりながら、2階の教室をめざして駆けていったのです。

2階の教室の中で、トラ猫は放心したかのよつこ、徐々に自分に迫つてくる炎の輪の中に立ちすくんでいました。

あの白猫が8番田の俺?……学校と生徒を恨んで、天国にも行けないあの猫が?

自分の事だと言われても、そんなの、トラ猫の記憶には全くありません。今の自分はノラ猫でも、餌はコンビニのゴミ箱をあされば出でくるし、時には虫や鳥やネズミ(ネズミくんには悪いけど)だつて狩ることができます。寝床だつて、冬は風呂屋のボイラーの近くは暖かいとか、そんな知恵ももっています。

自分はけつこいつ、毎日を楽しく暮らしている。でも、あの白猫はその事にも腹を立てているんだ。

“私がみんなに苦しんで悲しい思いをしたところのこ、8番田の私であるお前は、何でそんなに楽しげに生きているの?!”

何でなんだよ?俺は9番田のお前なのに、何でお前は俺の幸せを妬んでるんだよ?

白猫の言葉を思い出すたびに、トラ猫の心には、悲しいような情けないような、やるせない思いがこみあげてくるのです。

もうこいつしてこぬつむじこひこ、トラ猫の回りの火の輪は、ますます近づいてきました。

「こひつ、トラ猫、さつと逃げる!お前、焼け死にたいのかあつ!…」

教室の出入り口から、大声で叫ぶネズミの声が聞こえてきた時、

トラ猫は茶色のしっぽにちらりと嫌な痛みを感じました。

しかし、火はどうしようもないほど、真近にせまつてきていたのです。

「ネズミ君か？駄目だ。火のまわりが早くって、逃げるなんて無理だ！！」

「何とかしろよっ！何とかつ！」

「……そんな事言つたつて！」

ネズミは、あちちつ、あちつと声をあげながら、自分にも迫つてくる火の粉から逃げるため、そこらにこいらを行つたり来たりしながらも、トラ猫にエールを送り続けました。だが、トラ猫はあきらめたように顔をあげると言いました。

「ネズミ君、お前は逃げる。でないと、お前まで命を亡くすぞ」「えつ、そんなの駄目だよ。おいら、一人で逃げるなんてできないよ！」

そんなネズミに、トラ猫は笑つて言いました。

「馬鹿！俺様はあと一つ、予備の命を持つてるつて言つたのを忘れたのか？！俺は死んでももう一度、生まれ変わる事ができるんだよ！」

“猫は命を9つ持つている”

その言葉を思い出した時、ネズミは、はっと息を呑むように田の前の炎を見つめました。

「わかった！おいら、一ワトリ小屋の前で待つてるから！必ず、そこに来るんだぞ」

そして、一目散に外に向かつて駆け出して行つたのです。

“よいよ、火が体を飲み込もうとしてきた時、トラ猫は熱さに顔

をゆがめて思いました。

ネズミ君、ごめんな。俺の命はもう、残つてないんだってよ。今
の俺は9番田の俺。これは、最後の命なんだ。
でも、安心しなよ。ここで死んでしまつても、俺はみんなを恨ん
だりしないから……。俺は白猫と違つて、いっぱい楽しい思いをし
たんだから。だから……

わよなら

ところが、その時、

「トーラ猫君、何処にいるのー!？」

ぼんやりとした意識の中で、トーラ猫は金色に輝く炎を見たのです。

鳥?でも、この鳥……燃えてるぞ

その鳥はトーラ猫のすぐそばまでやつてくると、翼を大きく広げま
した。すると、それにからめとられ、教室の炎が翼の方に移つてゆ
くではありませんか。

炎の翼を広げた金色の鳥

“ファイアーバード!”

伝説の火の鳥？永遠の命を持つという

「トライ猫君、しっかりしてつーまだ、生きる気持ちを捨てないで」

ファイアーバード……でも、この声は？

「ハヤシ君……ハヤシ君なんだよな……」

トラ猫は、目の前にいるファイアーバードを信じられない気分で見つめました。

「駄目だよ。すゞく眠くて起きてなんかいられない。でも、二つ
トリ君、お前、なんでそんなに『ージャスになつてんの……？それ
とも、俺、夢見てるのかなあ」

いつちへ来て。一緒に私と行きましょう。

あの白猫の鈴のような美しい声が響いてきて、トトロ猫は“それもいいかな”と、思いはじめました。もう、炎の熱さも感じなくなつていました。

「トーリー猫君ー! 眠つては駄目。 田を開けてー!」

けれども、ファイアーアーバードの叫びに答える事もなく、トラ猫はかたく瞳を閉じてしまいました。その様を見て、ファイアーアーバードはぽろりと涙を流しました。

すると、

トラ猫たちがいた教室全体が、黄金に輝き出したのです。

炎を糧に永遠の時を生きるという伝説の鳥。 その涙は、癒しを、血を口にすると不老不死の命を授けるという

- ファイアーアーバード -

その鳥が、大きく翼を広げた瞬間、小学校の校舎に燃え上がった炎はからめとられるように、黄金の鳥の翼に吸い取られてゆきました。そして、トラ猫の体までが金色の輝き出したのです。

「トラ猫君の最後の命、私にはそれを見守る事しかできないのだけれど……」「……」

それでも、勇敢でひよっとやんちゃな9番田の君は、あの白猫の哀しい心をひやんと癒す事ができると思つよ。

* * *

嘘のように消えてしまつた校舎の火を見据え、ネズミは二コトリ小屋の前で啞然と空に田をやりました。

遠くに去つてゆく黄金の光。

「火の鳥……？」

まさか、ありえねえ！

その時です。校舎から二コトリ小屋に向かつて駆けて來たトラ猫の姿に、ネズミは万遍の笑顔を浮かべました。

「トラ猫君！ 良かつた。無事だつたんだな！ あれ……でも、お前、なんか変だぞ」

トラ猫君つて確かに茶トラだつたよな……なのに今は黒トラじゃないか。

不審そうなネズミを見て、トラ猫は笑つていいました。

「当たり前だろ、俺様は生まれ変わつたんだ。猫は命を9つ持つてゐる。これは、俺の最後の命、9番田の俺の姿なんだよ」

: * *

数日後、主のいなくなつた小学校の二コトリ小屋の前で、トラ猫とネズミは、手持ちぶさたな様子で校舎を眺めていました。燃えたはずの校舎なのに、焼け焦げの跡すらも今はありません。

「二コトリ君、もじつてこなかつたなあ……」

トラ猫の言葉にネズミはちょっと顔をしかめて言いました。

「でも、あのファイアー・バードが二コトリ君だったか、どうかも
わかりやしない」

「二コトリ君だよ。俺は、はっきり二コトリ君の声を聞いたんだ。
それに、あいつ、焼き鳥なんてとんでもないつて、えらく慌ててた
じゃないか。あたり前だよ、ファイアー・バードは炎の中で蘇るん
だ。焼き鳥なんかにされちまつたら、正体、丸バレだものな」

そりゃそりゃ、ネズミは、焼き鳥が蘇ってファイアー・バード
になる様を想像して、ふうっと噴出してしまいました。

「そういえば、おいらにも思ひ当たる節があるぞ。トラ猫君のつ
の命を羨ましいつて、おいらが言つたら、二コトリ君は“永遠の命
なんてつまらない。なんて……おかしな事を言つたんだ。何か変だ
とあの時は思つたんだけど……”

「だ・か・ら、二コトリ君はファイアー・バードだったって言つて
るだろ」

それにしたつて、行つちまつ事はないじゃないか。おいら、ファ
イアー・バードだって、ちゃんと仲良しくしてやるのに。

不満げなネズミの心を読み取つたかのよつて、トラ猫が言つまし
た。
「二コトリ君はきっと、普通の二コトリじつて、ここにいたかった
んだよ」

すると、ネズミは急に何かを思い出したように言つました。

「それはそうと、トラ猫君ー今のトラ猫君は9番目の最後の命。余
分の命は使い切つてもう、生まれ変わることはできないんだろう? でも、

驚いたなあ。トラ猫君はあの白猫の生まれかわりで、白猫は学校と幸せそうなトラ猫君を恨んで火をつけただなんて」
ネズミの言葉にトラ猫は、少し顔をしかめました。

でも、あの白猫は俺にはもう命は残つてないつていつてた。あの炎の中で俺は確かに死んだんだ。だから、生まれ変われるはずなんてなかつたのに……。

勘違いしていたのは、白猫の方だつたのか？それとも……これって、ニワトリ君……あのファイアーバードの何かの力か？

「わからんねえつ！ もう、どうでもいいや」

いきなり、大声を出したトラ猫にネズミはびくんっと体を強張らせました。ネズミは、投げやりな態度のトラ猫を諫めるように、こう言いました。

「何にしたつて、トラ猫君、お前はもう生まれ変わる事はできないんだから、命は大切にした方がいいぞ。あの火事でトラ猫君が炎にまかれて死んだとしても、白猫は嬉しくなんかなかったと、おいらは思うけどな」

すると、トラ猫は珍しく神妙な顔をして答えました。

「そうだな。俺まで悲惨な心で暮らしてたら、あの白猫だつて何時までも、恨みの心を持つたままだ。『猫は9つの命を持っている』それつて、俺は自分以外に8個の命を背負っているつて事なんだろ？だから、俺はせいぜい、楽しく生きる事にするよ。あの白猫のためにも」

ひげをぴんと立てて、そう言ったトラ猫に田をやると、ネズミはくすくすと笑みを浮かべました。そして、くるりとトラ猫に背を向きました。

「じゃ、おこり、もう行くから」

「おい、おい。何処へ行くんだよ~。むづむづと、話しつき合はんよ
「駄目!」これから、デートなんだ。四十田の美人ネズミ♪」

ちえつ、あいつ、しっかり楽しく生きてやがる。

そそくせと、駆けていったしまつたネズミを見送り苦笑を浮かべると、トラ猫はなにげなく空に田をやつました。
今日の空は雲ひとつない青い空です。

白猫君

お前の9番田の1の命、俺は絶対大切にするから、
安心して、ゆっくり眠つなよ。

俺はせこせこ、楽しく生きる事にするよ。他の8つの命と一緒に
なつて。

すうすうと空気を一つ吸い込むと、トラ猫はそれをふうと吐き出し、それからネズミが駆けていった方向と反対の方向に、軽い足取りで駆けてゆきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3574e/>

【Nine Lives】～9つの命

2010年10月17日05時07分発行